西村寿行

凌虐の町

凌虐の町

徳間文

徳間文庫

凌虐の町

西村寿行

徳間書店

徳間文庫

凌虐の町

© Jukō Nishimura 1997

著者　西村寿行
発行者　徳間康快
発行所　株式会社徳間書店
東京都港区東新橋一―一〒一〇五
電話(〇三)三五七三・〇一一一(大代)
振替　〇〇一四〇―〇―四四三九二
印刷　凸版印刷株式会社
製本

1997年8月15日　初刷

編集担当　渡辺　明　販売担当　斎藤博幸・橋本昭一

ISBN4-19-890741-2（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

目次

魔獣 5
まぼろしの群れ 63
鬼の幻視 109
凌虐の町 159

徳間文庫

凌虐の町

西村寿行

徳間書店

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

魔獣 5
まぼろしの群れ 63
鬼の幻視 109
凌虐の町 159

魔

獸

トドマツの老木にたわわに実をつけたヤマブドウが絡みついて登っている。空は快晴で碧い。トドマツの梢がその碧空に突き刺さっている。

門前勝正が足を停めてブドウヅルを見上げている。肩にはライフル。

「何か？」

並んで歩いていた伊南達志が声をかけた。

いや、というふうに門前は無言で首をわずかに振った。

門前は北海道庁が日高支庁浦河郡に派遣したハンター。年齢は六十近い。口数のすくない男だった。伊南は北海道新聞社会部記者。門前の了解を取りつけて取材に入っていた。何十年ぶりの悲惨な羆害が発生したばかりであった。報道陣が浦河郡に入り込んでいる。伊南は別であった。事故の発生から終わりまでを自分の眸でみる。自分の足で踏む。通り一遍の取材では済まさない。門前の力量如何によるが事故の全貌に伊南は期するものがあ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

った。

トドマツ林の背景に日高山脈が南北に連なっている。南のはては襟裳岬。地図ではピリカヌプリと神威岳と思われる雄峰が聳えている。

伊南は門前に四輪駆動のバンを提供していた。食糧は積み込んであるし、寝泊まりができる。町に戻ることも集落に頼ることもない。羆追跡に専念できる。羆だけではなくて惨劇の場から姿を消した黒木少年の捜索にも繋がりかねないとする希みがある。黒木は十七歳。ただし、黒木が羆を求めて山入りしたのなら、結果は目にみえている。さらなる惨劇だ。門前はそれを心配している。羆は殺した獲物に執着する。そのことのみに陰惨な思いを絞り込む。何日間かは現場の近くに潜んで機会を窺う。だが、いまは昔とちがう。銃も高性能のライフル。腕に自慢のハンター隊がアイヌ犬群を率いて追跡に出ている。黒木捜索の道警ヘリコプターも出動している。羆は遠走りをして退却するしかない。問題はその前に羆が山に分け入った黒木を発見したかどうかであった。発見していれば黒木は生きてはいない。啖われ尽くしてわずかな骨だけになっている。

――やつは、気が狂っている。

門前は山脈に視線を向けた。

黒木家を襲った羆は体重、およそ二百七、八十キロの牡。かなりの大物であった。前肢

の掌幅が約二十センチ。後肢掌幅三十センチ。羆は足跡で体重、牡牝が測定できる。いまは九月なかば。羆にもたいていの鳥獣にも餌が豊富な季節。高山帯に行けばおびただしいハイマツの毬果が待っている。羆の大好物だ。ホシガラスも群がり集まる。タカネナナカマド群も実をつけている。広葉樹林低木帯にはこれも大好物のヤマブドウやコクワがたわわに実をつけている。ナラやブナの実りもある。カケスがそれらを集めて埋める。羆はそれを掘り出す。カケスは埋めた場所を忘れる。雲を目印に埋めるからだという。忘れ、羆に奪われてカケスは森のそこここで啼きわめく。

森は生き物のいのちの糧と活気で充ちている。

この季節に羆が人里に下りるわけはない。やって来るとしたら、そいつは気が狂っている。そういう羆はたいていは古い銃弾を体に背負っている。ときには何発もの鉛弾を。羆は矢に強い。弾穴に羆は殺菌性のあるヨモギやササを詰めて血止めと消毒をするという芸当をやってのける。だが、鉛弾はときにいたずらをする。神経を傷つける。そうなると羆は凶暴になる。羆は復讐心の塊といってもよい。その狂気は人里に向けられる。

門前は森の奥に向かった。

ハンティング経験のない伊南には緊張の連続であった。狡猾な羆は待ち伏せに出るときいていた。昭和五十六年までの通算二十年間の羆害の統計がある。死亡五十九件のうちで

ハンターの死亡が二十四件を占めている。うちの十五件が〝不意打ち〟で九件が〝手負い〟。どちらも待ち伏せである。林内作業中が九件で山菜採取中が六件その他となっているからハンターの被害が圧倒的に多い。羆専門のハンターが羆の逆襲で殺されている。

黒木家を襲った羆は道庁が「羆一号」と指定した。去年は羆害は一件。それも怪我で済んでいる。人喰い羆の出現は明治、大正のことでそれ以降は絶えてなかった。いったん人を啖えば病み付きの習性となる。つぎもかならず人家を、人間を襲う。ただちに追跡して射殺しなければならない。道庁が羆一号に指定し門前を送り込んだ理由であった。

北海道の秋色には風情がある。

門前と伊南は元浦川沿いに登っていた。川の源流は神威岳から落ちている。川は中州、両岸とも植物が朱に染め上げられている。その朱の帯を風と光が渡っている。だが、秋色を賞でる余裕は伊南にはない。羆はその秋色のどこに潜んでいるともしれないのだ。近くにいるのならだ。そうなら、羆は二名の追跡者をすでに察知している。冬とちがって秋は人喰い羆を追跡するには厄介な季節であった。冬場なら羆は雪に足跡を遺す。雪に遺された足跡ならたとえそれが一つでも門前には情報の塊となる。ただし、羆はそれを逆用する。止め足がそれだ。羆は雪上に遺したおのれの足跡を何十メートルかうしろ向きで辿って、引き返す。引き返して任意の地点で立ち止まりそこから横に跳ぶ。兎がそうする。跳んで

兎は寝場所に入る。その止め足を発見すれば兎は獲ったも同然となる。羆はそうはいかない。羆は追われているときにそれをやる。待ち伏せに出る。ハンターが雪上に遺された最後の足跡を発見すれば、止め足だとわかる。羆がそこで掻き消えるわけはないからだ。だが、そこまで行く前にたいていは勝負がつく。羆は最後の足跡の何メートルか手前で待ち伏せているからだ。

伊南は羆害に関する文献を読み漁って来ていた。知識としての経験なら門前に引けはとらない。だが、門前の経験は血肉に溶けている。経験は本能的なものと同化しているといってよい。物腰をみていてそれがわかる。止め足も待ち伏せもいっこうに気にしてはいない。

門前は羆狩り専門のアイヌ犬を連れて来ていない。飼っている二頭のアイヌ犬は老齢なのだという。門前もその歳に差しかかっている。犬に歩調を合わせて狩りはやめていた。ここ二年ばかりは山に入っていないという。犬を連れないそのいいわけには殺しに倦んだ者の口調が宿っていた。道庁のたっての要請でしかたがなく家を出て来ている。その犬のいないことが伊南に緊張の連続を強いていた。アイヌ犬とも北海道犬とも呼ぶ純白の体毛を持つ日本犬中型犬は羆を狩る唯一の犬種といってよい。同種で体構の大きい紀州犬とともに気性のはげしさでは双璧をなす。アイヌ犬がいれば羆の待ち伏せは通用しない。羆の

嗅覚は定評があるが犬に較べると比ではない。

羆は聴覚に劣るとされている。解剖学的にも内耳器官は貧弱である。視覚がそれに次ぐ。羆には涙腺がない。そのことと関係があるのかどうか、攻撃中にすぐそこにいる相手を見失ってうろたえることが知られている。羆は敵が近づくと肚を立て、距離を置いて力のかぎり大地を叩くことが知られている。唸りながらだ。猟師はそれを〝うんうん〟と叩いているという。その限りでは羆はままにならないものを抱えているという気がする。嗅覚では犬に比較にならず、聴覚も視覚も貧弱となれば犬は羆にとって厄介なものとなる。何頭もの犬に追われると羆は巨木の幹を背に坐り込む。犬は背後から咬みついて肉を咬み千切るからだ。そのせいか貪欲の塊の羆が犬の肉だけは喰わないという。もう一つ、羆は蛇を忌み嫌うとある。羆牧場の実験ではだ。

だが、自然界では羆の胃から青大将が発見されている。

自然界と飼育下ではちがう。最大のちがいは狡猾さだ。羆害による死者の統計ではハンターが圧倒的だ。止め足などによる待ち伏せがそのほとんどである。狡猾の一語に尽きる。飼育下の羆にその狡猾はない。その待ち伏せにたいていのばあい犬は役に立っていない。犬は最後の足跡に向かって突っ走る。横に跳んだ臭いよりも歩いた痕の臭いのほうがまっすぐで強いからだ。もっとも犬はすぐに引き返して来る。しかし、犬が戻る前に羆は躍り

出ている。犬を連れていないばあいはどうしようもない。

羆の狡猾を支えているのが想像を超える復讐心。涙腺のない羆の双眸は怒り復讐心をたたえると血の色に染まる。血をたたえる復讐心といってよい。さらに奸佞がある。奸佞といえるのかどうかはわからないが、羆は人間の女を好む。明治から大正にかけての凄惨を極めた羆害では羆は開拓農家につぎつぎと殴り込んで女を妊婦を狙い、啖っている。女の臭いにすさまじい妄念を抱き、寝具、肌着はおろか女が枕にしていた石までバリバリと咬み砕いている。アイヌのいい伝えでは、羆は〝七沢越えて妊婦を襲う〟とある。

自然界と飼育下ではそれほどちがう。黒木家を襲い七十数年ぶりにみるも無残な惨劇を働いた羆の突然の凶暴性の発揮は、謎である。山に餌が豊富なこの季節であった。その謎に門前が挑んでいる。終止符を打とうとしている。犬も連れずに単身でだ。伊南は門前の足運びにたしかなものをみる。

門前は歩きつづけた。

山に分け入って三日目であった。

伊南は車に戻るとそのつど、本部に無線連絡を取る。

本部は浦河町役場に警察と合同で設けられている。たんなる羆害ではそこまではしない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com